

折口信夫と二上山

■山に会う子どもたち

なら 民俗通信

□270□

西村 博美

折口の歌に頻出するが、

▼「山のうへに」
「山のうへに、かそけく人は住みにけり。道くんだり来る心はなごめり」。先日久くなった詩人の大岡信は、「折々の歌」に釈道空(しゃく・ちようくう)の右の歌を引いている。

釈道空は、民俗学者折口信夫(しのぶ)の歌号である。

「大正十一年、民俗探訪のため静岡県磐田郡の奥領家(おくりょうけ)を訪ねた時の歌。山中に住んでいる人家。これと同じ時の歌より、『燈(ひ)ともさぬ村を行きたり。山かげの道のあかりは、月あるらしも』。まさに心なごむ。かそけき世界だ」(大岡信、朝日新聞、〇七・三・二二)。
「かそけく」の語は、

文 化

れたのは、「家の娘ではないと思われる女の子であった。その子の頭にした手拭いの白さが、山を越えてきた旅の疲れた身にいつそう、しみ入るように思えてくるのだ。」

▼「馬追ひの子」

また、上掲の三首と同じ歌集「海やまのあひだ」には、折口のこのような歌もある。

「馬おひて 那須野の闇にあひし子よ。かの子は、家に還らずあらむ」
「夜の町に、室(むろ)の花うるわははの、その手かじけて、花たはね居り」。

「馬おひて」の歌は、連作「塩原」十首中(大

つらさを思いやる視線

いる。しかも子どもの足で、帰途は闇の道なのである。

ただ、この歌は後にな

つて、「空想の所産」だといつことを明かしている(『自歌自註』)。ここで折口は、「かういふ野道を、而もたそがれに、小さな女の子でも、馬を追いながらたどつてあるとしたら、どうであらう。そんな気がした」「もとより想像だから、馬追ひの家路は、無限に遠く感じることが出来た」と言い、さらに「今でも此歌を嘘だと思つてゐない」と語っている。

「夜の町に」もまた、空想の歌であるのだろうか。どこか都会のにおいもするのだが、花売りの子は凍えそうな手に花束を束ねている。「室の花」とは、いまだいう温室の意か。早春の旅の詠であるが、幻影のなかにいるように思われる。

峠は驚の関(うぐいすのせき)との名も伝わる。河内の太子町から峠を大和に下ると当麻(たいま)の里。そして二上山は、折口が後に描く『死者の書』の舞台である。折口は、明治三六(一九〇三)年、十七歳の春

い。しかし、ここで押さえおかなければならないのは、「柴うりのかなし子」に注がれる折口の視線であろう。愛(かな)しいまで見えるその子の還りみちの遠さ、つらさを思いやる折口のまなざしがある。

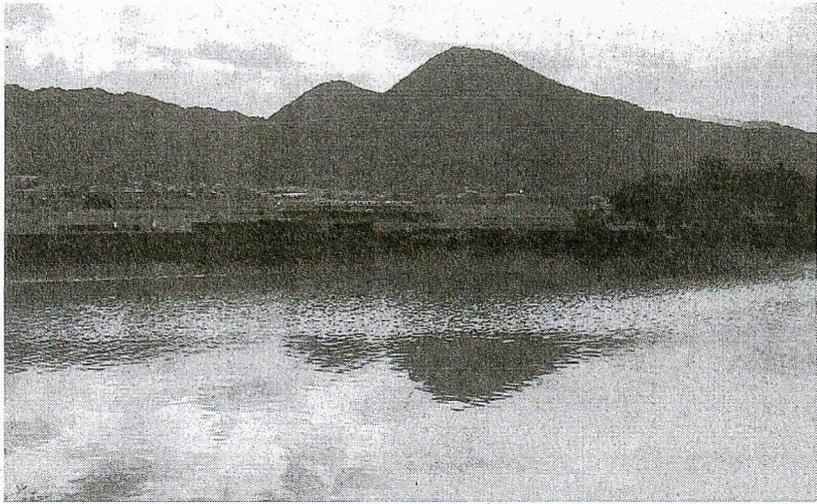
▼大和小泉の子

折口信夫は、乳幼児の一時期を大和郡山の知縁に預けられて、一時期を過ごしたことが知られている。

「向つ尾の峰つたひめく乳母が子の唄の絶まを震降る也」とは、折口自身その頃をしのぶ歌であらうか。

それはまた前掲の、折口に風呂を焚(た)いてくれた白手拭いの女の子や、那須野の馬追ひの、またある夜の花売りの子に、そしてまた二上山の柴売りの子へと寄せる折口の思いに、どこか通底するものを感じるのである。

(にしむら・ひろみ) 詩人、奈良民俗文化研究所研究員



二上山の夕景

次回(来年)2月2日掲載予定